

# 横浜の中のアジア

## ① 市民作文にみる「アジア認識」

紀田順一郎

### 一 育つ新しい国際感覚

福沢諭吉が「脱亜論」を唱えたのは明治一八年（一八八五）、岡倉天心が「アジアは一つ」という命題を掲げたのは明治三五年（一九〇三）である。前者は当時の政情を反映した時局的発言であり、後者は美学的発言にすぎないけれども、日本の近代化の過程で歪曲され、第二次大戦の主導理念として利用されたのは周知の通りである。

戦後三十数年を経過した今日、私たちがナイーブなアジア一体論にも、脱アジア主義にも組するものでないのは当然で

あるが、それでは第三の道として、新しい何かが発見されたかといえは、大きな疑問を感じないではいられない。戦後の出発点に立ったとき、私たちは自分をアジアの一員として位置づける努力をしようと思っただけでも、その後のグローバルな意味での政治経済の動向、葛藤は、素朴な理想主義を粉砕してしまった。一口にいえば、私たちは「アジアは一つ」と「脱亜」との間に引き裂かれ続けてきたのであり、その意味では八十年間、何の進歩もなかったといえるかもしれない。

しかし、本当にそうなのだろうか？

私たちは手垢にまみれた明治の理念から跳躍できないでいるのだろうか？

結論からいえばそうではない。今回横浜市が募集した第一回Y.L.A.P市民作文一四七篇を通過して、戦後三十七年目の今日、さすがに新しいインタナショナルな感覚が育ちつつあることを知り、未来への希望が湧いてくるのを抑えきれなかった。

しかし、結論にとびつく前に、作文の実例に即して考察してみたい。

ある会社員（四十二歳）は、日本とアジアの相互関係が密接不可分になっているという「客観的事実」と、日本人のア

① 市民作文にみる「アジア認識」  
② 横浜に住むアジアの人びと

- 一 育つ新しい国際感覚
- 二 問われる身のまわりの「アジア問題」への対応
- 三 新しい民衆外交の可能性
- 四 必要な実践への一歩

ジアに対する「関心の薄さ」とのギャップを指摘したうえで、その解消が当面の課題であるという命題を提出する。

「アジアへの関心と理解」ということを言葉で表現することは容易だが、それを何万回叫んでも問題は解決しない。具体的な方策の一つとして、改めて地図・地理書・歴史書等からの再認識が求められる。

このような「総復習」を通じ、華僑問題、インド・パキスタン間のカシミール問題、スリランカの言語問題、香港の租借地期限問題、西沙・南沙諸島の領有権問題、マラッカ海峡問題等の概要が把握

される。

横浜の歴史的性格からしても、我々市民はアジアの基本的現況を深く把握、認識すべく務めることが求められる。古くからアジアは一つといわれるが、市民一人一人のアジア再認識が、「アジアは一つは横浜から」に通じていくであろう。

これは今回集まった作文の典型である。一見してわかるように、問題の所在は明確にされている。ほとんどの作文は、最小限この程度あるいはこれ以上の認識を備えている。とくに「アジアは一つ」という天心の言葉は、そもそも本企画の題名である。「わたしの中のアジアと日本」を読んで瞬間に連想されているらしく、比較的若い年齢層にも引用されている。

アジアの現下の問題についても、ベトナム難民、中国孤児、日ソ問題その他あげればキリがないが、ここに列挙された事項は応募者がアジア問題に並以上の関心があることを示しており、しかもこのことは他の人々にも共通するのである。まことに横浜市民ならではのべきであらう。

## 二——問われる身のまわりの 「アジア問題」への対応

この作文について問題点をあげれば、書物を通じてアジア認識を深めるとい主張である。それじたいは賛成であるが、もう少し実社会の中での実践性が欲しいと思う。さまざまな情報からアジア問題を考察しようという姿勢は評価しているが、私たちの身のまわりにも多くの「アジア問題」が存在する。それらについてどう考えるのか、現実になにをすべきかということが、問われなければならぬ段階に来ていると思う。

じつところ、今回の応募者のほとんどすべてが、アジアについての理解を深める必要性を強調しながら、その地点にとどまっていた。とくに戦前派や企業の中堅クラスに属する男性の場合、仕事等で台湾、中国などと深く関わりながら、そこから先へ一歩も進んでいないのは惜しまれる。せっかく正論を展開しながら、停滞してしまっているのである。

フィリピンの事情に詳しい六十歳の男性は、一部日本人の破廉恥な行為（買春旅行）を批判したのち、明るい話題としてクロムの製品化をあげ、今後の課題として日本が「知恵ある友」として高い水準の技術を提供することが必要だと訴える。そこから経済を基盤とした息の長い、真の友好関係が生まれるというのである。

大筋としてはその通りであらうが、知

恵ある友というあたりに、やはり、「先進国」としての思いあがりを感じられるとはいえないだろうか。さらに国交は経済的基盤が必要であるにしても、それだけでは万全でないことを、過去の事例が示している。別の視点が要求されるのである。

アジアにおける日本の特殊な位置から、多くの人にとってアジア観の再構築がいかに困難であるかということ、あらためて感じさせられた。三十九歳のある男性は、英国の学生寮に寄宿しているさい、同宿のタイ人と食事を共にすることにより親交を深め、彼らから「日本に留学するタイ人が人種的偏見に苦しみ、反目的になって帰国する」と聞かされ、

「今度、君が日本に来る時は、日本はやはりアジアの仲間だ。日本人は尊敬に値する兄貴分だと言われるようになっていよ」と、タイの親友に呼びかけているが、現段階ではそれが期待にすぎないこととは、筆者自身が一番よく知っていることだろう。むしろ、この個所が日本人同胞への痛切な呼びかけであるのはいうまでもないが、残念なことに、貴重な体験をいかに具体的な実践へ結びつけていくかという考察がない。

これらの人々の論旨が間違っているわけではない。むしろ高い見識の持主とす

らいえる。とりわけ、企業活動に従事している場合、応募者に関する限りは「私利私欲にとらわれぬ、心の交流」を主張するとうぐあいで、このような企業ばかりだったらと、溜息が出るほどである。

しかし、現実にはアジア各国に進出した日本企業が、現地の人々と摩擦を起こしている。それはなぜであらうか。問題の所在には気づいても、実際にはうまく行かない。経済行為を基盤とする「交流」には宿命的ともいえるべき限界がつきまとうのではないかと思うが、企業人であるほど、そのことは認めがたらない。つまり自らを客体視しえない。

## 三——新しい民際外交の可能性

このような観点から見るとき、立場や環境を全く異にした主婦や学生に新たな可能性を見出すのも、一つの必然といえるべきであらう。

今回の最優秀賞に選出された沢順子さんは三十九歳の主婦だが、子供を台湾系の保育園に入園させることから、自然に国際交流の機会が開けていく。主任の先生との交流を通じて中国人の気質を知り、台湾人親子と仲良くなって、かの国の複雑な様相をかいま見る。フランスで暮らしたことがある沢さんは、一般に外国

での生活が不自由であるという考えから、保育園に昼寝用の新しい毛布を持参したり、バーゲンで買ったパンツを寄付したりするが、ある時、自分の行為は間違っているのではないかと考えこんでしまう。かつてフランスにいたとき、寄宿舎にいた韓国人留学生（女性）がメキシコ人から古靴を投げ与えられ、烈火のごとく怒ったときの事を思い出したからである。「すごい侮辱よ。東洋人の一人として決して許せない！」

その「東洋人の一人として」ということばに衝撃を受けたのが、沢さんのアジア体験の原点にある。住んでいる山下公園から中華街のネオンを見て、そこに住む人たちの心を知りたいと思うようになるのも、自然の成り行きであった。沢さんの文章の中で最も重要なのは、次の個所である。

「私はようやく気付いたのである。ああ、そうだ。且つてのメキシコの娘のように、私の中に思いあがった気持が心のどこかに、ちよっぴりでも無かったと言いきれるだろうか。

純粹な友情は対等でなければならぬ（中略）。今私たちは手を貸す立場にあるかもしれない。が、この一見したところのゆとりは何時まで続くだろうか。私は謙虚に自分を見つめ、相手を見つめ、今自分に何ができるか、何をすべきか、

相手に何を求めるのか考えて行こう」。

こうした自然で実践的な交流と、その中から発した自己反省（客観化）、ナイーブな感受性が、新しい民際外交の可能性まで示してくれる。なお、ここでは作文の技術についてはふれないが、間断するところのないものとして推すことをはばからない。

同じく最優秀賞に選ばれた藤本典子さんは中学三年であるが、二歳の時から三年間タイに住んだ思い出を語る。大病をした母親を現地の医者に助けられ、その後弟が生まれたことから、「二つの命をタイからもらった」という認識をもっている。

作文は家主の子供「エック」に呼びかけるスタイルをとっているが、エックの父親からタイのガイドブックを買ったことにふれ、次のように述べているのが心をうつ。

「私は幸せなことにアジアの一部であるタイを肌で感じた一人です。そんな尊い事実を無駄にしくありません。そして、幼い私にズシリと重いこの本を手渡してくれたあなたのお父さんは誰よりも自分の国を愛し、外国人である私達に自国を正しく知ってほしいという気持が強かったにちがありません」

タイの経験からアジアに根強い関心を抱きつづける藤本さんは、ユニセフの事

業に参加したいという具体的な目標をもって、語学に取り組んでいる。十五歳、中学三年生にしてこのしっかりした生き方には感服する。真のアジア交流は、このような世代の成長とともに、ルートに乗っていくのであろう。

アジアとの実際の交流という点では土橋泰子さん（四六）が先輩格である。少国民世代である土橋さんは、少女時代に東南アジアの民話に大きな興味を抱き、努力してビルマ語を修めた。当時の世代はアジアに偏見を持っていたが、土橋さんは特別な体験をしている。それはデパートか何かの見せ物でミクロネシアの人たちを見たとき、思わず「あ、南洋の土人！」と言ってしまったところ、同行の父親から「土人、土人というけどな、われわれも土人やで。日本島の土人や」と穏やかにたしなめられたことである。

このような人がいたということは、当時の国情を知る者としては驚異であるが、土橋さん自身もそれに開眼され、南方童話への関心を深めていったのであるから、いわば日本人離れしているといつてよい。

土橋さんはビルマ語の専門家であり、プロとしての活動をしている人であるから、一般市民とは少し立場がちがう。そのような意味で「特別賞」という別枠を設けさせて頂いたが、正直いって実践性

には脱帽する。そして、「ビルマの素晴らしい文学を日本の人たちにもっと読んでもらいたいし、ビルマ語をただ上手に話す日本人でなく、ビルマ人の心がわかるビルマ語の使い手も育てたい」というとき、その説得力には心うたれる。いわば知識人の代表という格であるけれども、この世代の女性が成熟した感覚をもって、身近のアジア問題と取組めるような体制づくりがのぞまれる。

堀純子さんは高校一年である。「ねえ、バドミントンかバスケット部に、山手中華の人がいるんだってね」という出だしで始まる。ヤング感覚あふれる作文である。しかし、この会話が友人の「ねえ、あさ、普通の人と同じなの」という質問に発展する個所から、大人の読者はギリとする。偏見や差別がテーマだと知れるからである。

ところが、堀さんは大人の心配するような、じめじめした観念にふり廻されることなく、カラリとした感覚で、いま学園内で進行している事柄をレポートしていく。優秀な学校へ入りながら、将来の就職のために転校していかなければならぬ男子生徒……。

「なぜ、彼は行かなければならなかったのですか。私達は皆同じでした。そして今も同じでしょう。差別というその事が、私にはよくわかりません。一体どこ

がちがうというのですか」

この事件を契機に、堀さんの「差別」への関心、アジアへの視野は大きくひろがる。作文がナイーブなだけに、その内的プロセスがよく表われていて感動的である。この作文は作者の資質でもあろうが、観念が空転することなく、一方では素朴なレポートが幼稚っぽく見える部分もなく、しっかりした眼を感じさせられる。将来を大いに期待したい。

在日韓国人主婦の武田玉子さん(四一)は、自分たちが言葉や生活環境のちがいに加えて、差別という二重の苦しみを背負っていることを訴え、子どもの差別問題を周囲の日本人の善意で解決したいきざつを綴る。その中で、差別する子どもは、むしろ親の方に一種の社会不適合があるということ、平和やヒューマニ

ズムの教育も母親がしっかりしていなければ成り立たないことをあわせて訴える。率直で心をうつ文章である。この作者にとり、日本語は外国語であるから、苦渋のあとが見られるが、それがかえって訴求力(迫力)を強めている。

#### 四——必要な実践への一歩

以上、駆け足の紹介と分析になったが、市民のアジア意識の概略については理解して頂けたと思う。むろん、これは応募者についての話であり、いわば意識の高い人々のサンプルである。現実にはアジアの問題などに無関心な層も多いかと思われる。

しかし、応募者についていえば、多数の人々がアジア各地に商用で出かけた

り、滞在したり、ツアーで出かけたたりといった経験をもっている。そして、その人なりのアジア観を形成しつつある。

それは大変心づよいことだが、アジアという鏡に映じた日本人像は意外に画一的で、実践へ向かっての一歩が踏み出せないでいるという印象を強くうけた。過去への反省も必要だし、現状をしっかりと把握することも必要だろうが、それが表面的なものにとどまる限り、対アジア関係は好転しないだろう。

そのような行きづまりが感じられたからこそ、若い世代の純な感受性への期待が強まり、入賞へとつながった。さらに子育てを終えた年齢の主婦層の実行力が高く評価されたといえる。〈評論家・市民作文「わたしの中的アジアと日本」選考委員〉

●本年六月に「国連・アジア太平洋都市会議」(詳細は本誌六三頁参照)が開催されるのを機会に、同会議実行委員会では市民から「わたしの中的アジアと日本」というテーマで作文を募集した。一四七篇の応募があり、その中から一三篇が入賞した。

●応募総数 一四七▽性別・男 八九女  
 五八▽年齢別・二〇歳未満 一一二二〇  
 代 二七 / 三〇代 三三 / 四〇代 三三  
 五〇代 一六 / 六〇代 一六 / 不明 一一  
 一▽職業別・会社員 二六 / 公務員 二  
 八 / 教員 二七 / 自営業 二六 / 学生 二二  
 主婦 二五 / 無職 一〇 / 不明 二二  
 ●入賞作品 ▽最優秀賞 二 ▽特別賞 一一 ▽優秀賞 一一〇

●最優秀賞二篇と特別賞一篇を本誌五五頁〜六一頁に掲載している(編集部)